

「九段下の『昭和館』について」を読んで

高15回 岡部恒雄

佐々木典夫氏の『昭和館』について、少し縁のあることとして感慨を記します。

私は、昭和十九年四月十日の東京府日本橋区両国三十六番地に生まれました。薬研掘不動と同じ町会で千代田小学校（現在は日本橋中学校）の玄関向かい側の家でした。昭和二十年三月十日の東京大空襲により、現在住んでいる入間郡入間川町へ縁あって疎開しました。まだ一歳に満たないため、私は兄の延夫（両国高校↓川高二回・疎開組）の背に負われ災禍を逃れ、今日までコロナ禍もなく息災で今日に至っています。

戦争という記憶はないがこんな経験したことを親から聞いたこともあり、また、東京都に入ったときは美濃部亮吉知事で、丁度その時期、早乙女勝元氏を中心に東京都公文書館が精力的に「東京大空襲」の資料を蒐集していました。これは、「東京大空襲・戦災誌」として全五巻（一卷千ページ程）として発刊されました。そのなかに、親や兄がよく知った方々の証言記録が掲載されています。

その後、東京都江戸東京博物館副館長時代に、東京都平和記念館の設立の構想が青島幸夫知事のとときに起り、大空襲で壊滅した墨田区の横網町公園内に二〇〇一年に開館する予定でした。

三三〇名を超すビデオ証言記録や多数の戦争体験者の証言を集めました。証言者のなかには歌手の並木路子もありました（余談ですが、渋谷百軒店の店に何回か行ったことがあります。）。

しかし、この展示内容について、歴史認識をめぐる意見の相違（例・十五年戦争史観や東京は軍都が否かなど）や財成難などにより現在も凍結状態になっています。

このような状況のなかで、江戸東京博物館にも「第二次世界大戦」の展示コーナーがあり、副館長時代、当館の展示表現にも波及し、都議会の歴史認識論争に少なからず影響を受け、都議会に呼ばれたことがあります。一つの妥協策であったのでしょうか、墨田区横網町公園の一角に「東京大空襲犠牲者を哀悼し平和を祈念する碑」がささやかながら建立されました。

こうした経緯から、『昭和館』の開館には並々ならぬ苦労があったことを察します。佐々木氏とは川越初雁会創設時から飲食をとにもすることがありましたが、このような話は初めて伺うことでした。

早乙女勝元氏を中心とするグループは東京都とは別に、「東京大空襲・戦災資料センター」（江東区北砂）に二〇〇三年に設立されました。館長はこれまで早乙女氏が就任していましたが、この度、一橋大学教授を停年退職した川高二十五回卒の吉田裕氏が就任されました。同氏は「日本軍兵士―アジア・太平洋戦争の現実」（中公新書）で三年前に新書大賞を受賞した方です。

川高卒ということで、不思議な縁があるもんだなとまたまた感慨深くなりました。